

故大平総理を偲ぶ

外務大臣 伊 東 正 義

故大平総理の死は、正に戦場で倒れた戦士の壮絶、凄愴な死でありました。枕頭にあつて故大平総理の最期を見届けた瞬間、国政の渋滞は瞬時も許されぬこと、人との争いを好まぬ大平総理が皮肉にも運命のいたずらが、党内抗争の渦中の人となり、病床にあつて常に選挙の推移、党内融和、政局の安定を憂慮しておられたが、これで最早争いのない安らかな世界に眠る人となつたこと、そして四十五年余にわたる変らざる私との交友関係等、公私にわたる思いが走馬灯の如く私の脳裡を去来したのであります。

故大平総理の在世中は種々批判もありましたが、それは神でない人間の身、致し方のないことで、大平総理は「温かい思いやりのある人柄、一度熟慮して決めたことは迷わず実行する性格、自己顯示を極端に嫌う八二カミ屋、争いを好まず包容力に富み、およそスルイということとは正反対の誠実な人柄」でありました。

故大平総理との附合いは同じく昭和十一年に大蔵省と農林省に入省し、戦時中は興亜院に派遣され、共に青春時代に中国の生活を経験し、当時同じ興亜院に席をおいた故大平総理、佐々木前通産大臣、磯崎元国鉄総裁、村田ジエト口理事長等九人で九賢会を結成し、故大平総理を誰が決めるともなく極く自然に九賢会の代表格として、今日に至るまで変らざる交友関係を続けてきました。

私は復員後は満二年間、駒込林町の故大平総理の旧邸で居候生活をしたのでありますが、故大平総理との貸借対照表は私の一方的な借方ばかりであります。当時よく議論をしましたが、市場原理を基礎とした自由主義体制の信奉者であり、これは総理時代にも変わらず国会でも信念を吐露し、自由主義経済の効率性を説いて止まなかつたのであります。

故大平総理の下で私が内閣官房長官となり、病床で最期を看取り、棺をかつぎ、内閣・自民党合同葬の委員長を務め、そして静々と第二次大平内閣を鈴木内閣に引き継ぐことができたことは、何かの因縁か運命の不思議さを感じます。

合同葬儀はカーター大統領、華国鋒首相を始め各国から多数の首脳の参列を得て、空前絶後とも思われる盛儀でしたが、特に数多い庶民の方々が沿道で棺を見送り、また葬儀にも参列していただいたことは、故大平総理の人柄を偲ばせるものでした。

故大平総理の政治家としての途は、生まれ、華々しく、内閣官房長官、外務大臣、通産大臣、大蔵大臣の各要職を歴任し、党にあつては政調会長、幹事長の重責を果たしました。特に外務大臣として日中国交正常化、日中航空協定の成立には文字通り生命をかけ、今日の日中友好協力関係の基礎を築いたこと、幹事長としては誠心誠意福田内閣を支え、党勢拡張、党内融和に努めたことは、万人の等しく認めるところであります。

内閣を組織するや、東京サミットを成功裡に開催し、また第二次石油ショックを巧みに切抜け、日本経済の繁栄、国民生活の安定を図るとともに、イランにおけるアメリカ大使館員人質事件、ソ連によるアフガニスタンへの軍事介入に当つては、迷うことなく西側の一員としての国際的な責任、役割を果たし、国際的な信頼を高める等、内外共に見るべき実績を挙げたのであります。

特筆すべきことは、故大平総理が若手の学者、文化人等のグループを組織し、田園都市、地方の時代、家庭基盤の充実、総合安全保障、環太平洋連帯等の各構想を研究成果として世に問い、二十一世紀に向けての日本の進路を示し、その具体化を提唱されたことは、今までの政治家の発想とは一味違った鋭い洞察力、政治哲学の持主であつたことを示すものであります。

故大平総理の死後、その死を悼む声が各国首脳の間で高まり、国内でも故大平総理の政治家としての資質が再認識されておりますことは、その生前を思い感無量なるものがあります。

故大平総理を失い、私は心に大きな空虚を感じておりますが、しかし一面、老残の身をさらすこともなく、恰も役者が舞台で倒れ最後の息を引き取つたような見事な宰相の生涯であつた、と私は心を慰めております。

私の執務室には、温容今にも人に語りかけるような故大平総理の写真が、私を温かく見守ってくれています。

故大平総理の霊は、こよなく愛した長男正樹君の墓と並んで多磨霊園に眠り、日本の進路を、そして遺族の方の幸福を見つめています。